

秦漢時代における中国西南地域の民族

羅 二 虎*

Minor Tribes of South-Western China during the Chin and Han Period

LUO Erhu*

This article deals with the major tribes of south-western China during the Chin and Han period (316 B.C.-220 A.D.) and their classification into several groups as well as a description of their distribution and cultural characteristics. The expansion of the Chin and Han dynasties into the south-western part of China had significant effects on the movement of minority groups.

The invasion of Han immigrants and the southern movement of the northwestern "Di" descent tribe had implications on the movement of the "I" and "Pu" descent tribes. From the cultural standpoint, the settlement of the Han and the ruling system of the Han and Chin dynasties had lasting effects on the local culture and, indeed, a major cause of its decline was due to the mighty Hua Hsia civilization.

I 序 言

本稿での論述対象は、秦漢時代における中国西南地域の民族である。ここでいう「秦」とは、秦が中国を統一した後の秦の時代（紀元前221年～前206年）を指すのみでなく、秦が南へ下って巴国と蜀国を滅してから、秦が滅亡するまでの時代を指す。即ち、紀元前316年～206年の秦である。よって、本文が扱う時代の範囲は、大体紀元前316年～紀元220年の約500余年である。本文が扱う地域の範囲は、主に秦漢帝国に属する西南領域であり、具体的に言えば、秦漢時代における巴蜀区域と西南夷区域を指す。これは大体現在の中国西南域に相当するが、差異もある。

II 地理概況

本稿で述べる西南地域は、自然地理で区画された中国西南地区に大体相当するが、それよりやや広く、北緯23度から33度50分、東経98度から112度の間に位置している。大体現在の四川

* 四川大学歴史係；Department of History, Sichuan Union University, 29 Wangjianglu, Chengdu, Sichuan, People's Republic of China

省、貴州省、雲南省および湖北省の西部、陝西省の南部、甘肅省の南東部と広西壮族自治区の西北部などの区域を含む、約120万平方キロの面積にわたる地域である。

西南地域は、中国内陸部にあり、世界の屋根と呼ばれる青藏高原から低海拔の華中丘陵平原までの間に位置する過渡地帯である。これは中国地勢の垂直変化を示す「三大階段」中の第二階段になる。その大部分の区域は、海拔が500 m～2,000 m である。この地域内の地理的特徴と自然景観は複雑多様であるが、東西二つの大きな地理的単位に分けて見ることができる。

西部は、山地高原であり、横断山区とも称する。青藏高原の東南部に位置し、東側が四川盆地と雲南高原に隣接し、主に四川の西部、チベットの東部、雲南の西北部などの区域を含む。南北に貫く数多くの平行河川が高原を南北に平行した配列の山脈に分割する。山谷河川の高低の差は大きく、谷々の海拔は大体2,500～4,000 m であるのに対し、山々の多くは高さが5,000 m 以上ある。高原性の気候であり、年降雨量は400～1,000 mm である。草原の面積が広く、伝統的牧畜業地域である。

東部は、盆地、山地、高原からなる。亜熱帯モンスーン気候であり、年降雨量は通常1,000 mm 以上である。植生は殆ど常緑広葉樹林（照葉樹林帯）に属し、伝統的稲作農業地域である。南から北までいくつかの大きな区域に分けることができる。

秦巴山地とは、主として四川盆地の北側にある大巴山と秦嶺に挟まれた区域を指す。北亜熱帯湿潤モンスーン気候である。山地の海拔は、大体1,000～2,000 m で、大巴山と秦嶺の間には海拔1,000 m 以下の盆地が分布している。

四川盆地は、秦巴山地の南に位置し、中亜熱帯丘陵性盆地湿潤気候に属する。盆地底部の海拔は殆ど300～700 m である。盆地の西部には、西南地域で最も面積の大きな平原——川西平原があり、その広さは約722平方キロである。盆地の周りには、海拔が1,000～2,000 m の山地が多い。

貴州高原は、四川盆地の南に位置し、その東部は四川盆地の東にある鄂西山まで延びている。中亜熱帯山地高原湿潤気候に属し、石灰岩景観をなす。海拔は殆ど1,000 m 位である。

雲南高原は、四川盆地と貴州高原の西南に位置し、雲南の大部分の他に黔西高原と川西南山地なども含まれる。ここの気候は乾湿の差が明らかで、一年を通じて四季の気温変化が小さい。海拔は大体1,000～4,000 m 位にあるが、高原の海拔は平均2,000 m 位にある。大体、中亜熱帯・高原的乾燥気候に属する。

立体的分布で見れば、西南地域自体を、三つの階段に分けることも出来る。第一階段は四川盆地と漢中盆地など海拔が300～700 m にある盆地地帯である。第二階段は、海拔が1,000～2,000 m 位にある秦巴山地、四川盆地周辺の山地、貴州高原と雲南高原等である。第三階段は、海拔高が2,500 m 以上になる西部山地高原となる。大きい区域に見られる立体的分布上の変化以外に、多くの小さい区域にも立体的分布の変化が比較的大きく、異なった生態帯が見ら

れる。西南地域の地貌には次のような二つの顕著な特徴がある。即ち、(1)殆ど山地と山地高原である。(2)山地と山地高原の間に盆地が数多く、散在している。

この二つの地理上の重要な特性は、西南地域における古代の民族の分布および政治、経済、文化の発展に大きな影響を与えた。

山地と山地高原の中では、生態の分布がほぼ垂直的变化を呈しているため、結果的に、同一地区に住む住民の経済様式と文化形態の分布にも多種多様な垂直的变化が現れ、多民族の集団混居およびその垂直的分布が容易に形成されやすい。西南地域内に盆地の数が極めて多いが、四川盆地以外は、皆小さい盆地である。例えば、雲南省内では、盆地は1,442あるが、盆地の総面積はわずか2.4万平方キロであり、全省の面積の約6%にすぎない。その中で、昆明盆地の面積は最も大きく、1,071平方キロである。西南地域には、平原が非常に少なく、川谷の両側に分布する少数のものを除けば、殆どが盆地の中にある。盆地は普通、地勢が平坦で、水源が豊富であるために、自然的条件が比較的良く、農業に有利である。このため、これらの盆地内の農業は発達がよく、昔から西南の「穀倉」と称されている。また、農業の発達と人口密度の高さのお陰で、昔からこれら小さい盆地は、それぞれの地域で政治、経済、文化の中心となっている。漢人がこれらの区域に進入して後は、盆地に集中して住みつくことになる。

III 歴史文化

ここでは主に秦漢時代とそれ以前の歴史文化を簡単に紹介する。秦漢時代には、人々は、習慣的にこの地域を二つに分けていた。即ち巴蜀区域と西南夷区域である。巴蜀区域とは、四川盆地と盆地周辺および秦巴山地あたりをまとめた範囲を指し、東側は湖北省の西部山間地帯に至る。西南夷区域とは、巴蜀区域の南と西を含めた西南区域を指す。

1. 秦支配以前の巴蜀区域

古代文献の記載によると、紀元前316年に巴蜀が秦に滅される以前、この区域には主に二つの国家があったといわれる。即ち、巴国と蜀国である。巴国の領域は、四川盆地の東部、湖北の西部山地を含み、中心的な区域は、揚子江沿岸の重慶あたりにあった。蜀国の領域は、主に四川盆地の西部であり、北は秦巴山地の漢中盆地あたりにまで至る。中心的な区域は川西平原にある。

巴人は、最初はおそらく湖北の西部に住んでいた。そこから揚子江を遡って、四川盆地に入り、四川の東部と湖北の西部あたりで生活を営んでいた。先秦漢晋時代の文献によれば、巴国の早期の王族は「姬」を姓とした周王族の一族であった。後、周王が封じて巴子となり、西周春秋の時代に湖北西部の江漢流域あたりで活動していたとのことである。

蜀国には、相当長い古史伝説時代がある。即ち蚕叢、柏濩、魚鳧、杜宇、開明など五つの王朝の交代があって、それぞれの王朝が数百年の歴史を持っている。各王朝の創始者は、最初に皆一族を率いて、異った方向から川西平原に入ったと思われる。彼らの時代は大体中原地域にあった夏、商、周時代に相当する。紀元前8～前7世紀頃、川西平原一体に、大洪水が発生した時、杜氏の蜀王杜宇は、鯀霊氏を治水相に任用して洪水を治めた。しかし、鯀霊氏はその功績によって、勢力が強大になった後、蜀王を追放し、蜀区に最後の王朝即ち開明王朝を建立して、秦に滅されるまで蜀国を支配していた。

巴蜀区域内における考古学的な文化の様相は、比較的似通っていることが示されている。考古学上の発見によれば、この区域は、少なくとも紀元前15～前14世紀頃、既に青銅器時代に入っていた。大体これと同時に文明時代に入り、蜀を中心に絢爛たる文明を創造していたことが判っている。秦が巴蜀を滅す前、この地区で恐らく中原地域から輸入されたと見られるごく少量の鉄器を発見したにも拘わらず、相対的には依然として青銅器時代にとどまっていた。

巴蜀地区の青銅器時代は、前後二つの時期に分けられる。前期の文化は、「三星堆文化」と称され、後期の文化は、「巴蜀文化」と称される。「三星堆文化」の年代は、大体紀元前16～前6世紀であり、分布範囲は、南部にあるいくつかの区域を除いて殆ど全巴蜀区域を含む。「巴蜀文化」の年代は、大体紀元前6～前2世紀である。当該文化の後期即ち秦が巴蜀を滅した後、この文化は、しだいに鉄器時代に入った。その分布範囲は、「三星堆文化」の分布範囲と重なって、後に南へ広がる趨勢が見えた。この文化の中に、巴文化と蜀文化があるが、様式は相当一致し、差異が非常に小さいため、考古学では、それらをまとめて「巴蜀文化」と命名したのである。また、巴蜀文化の中に、当時すでに、中原地域の文字と異なった文字が出現した。この文字は、表意を主とする文字系統に属し、現段階ではまだ判読不能である。

2. 漢に支配される前の西南夷区域

中国の古代文献の中で、最も早く西南夷区域の歴史を記載したのは、前漢中期の司馬遷による『史記』である。『史記』によると、漢以前の西南夷族区域は、いくつかの区域に分ける事が出来、「滇国」や「夜郎国」などの比較的大きな国家が存在した。「滇国」は雲南高原にあり、滇池区域が中心となる。戦国時代に、楚国の遠征軍が莊驪將軍に率いられ、ここを征服したが、秦国に楚国との通路を遮断されたため、やむを得ず、「服を変え、その俗に従い」、滇国を創立した伝説がある。「夜郎国」は貴州高原にあり、北盤江（漢の時代ではこれを牂柯江と称す）流域が中心区域となる。その区域の社会は、まだ国家組織が出現以前の状態であった。明確な社会分層と首領が出現し、組織形態が酋邦に相当する社会もあれば、まだ明確な社会分層と首領が出現せず、組織形態が部落社会のものに相当する社会もあった。

司馬遷は、厳格な態度で執筆し、取材も幅広く、西南夷地区にも足を運び、実地調査を行っ

たこともあるため、記載は比較的正確であり、基本的に考古学で発掘された実物資料と一致している。

この広大な区域では、場所によって、青銅器時代に入る時期も異なるが、ほぼ中原地域の春秋時代（紀元前8～前5世紀）前後に相当する。この区域には多種多様な青銅器文化が存在し、中でも南の雲南高原のものが比較的よく発達していた。前漢中期（前2世紀末期）、漢の勢力が進入する以前にわずかに鉄器が発見されてはいるが、総じて言えば依然として青銅器時代にとどまる。

雲南高原で青銅器文化の遺物が発掘された場所は、殆どが高原上の小盆地にあり、ほぼ二類型に分ける事ができる。東部にあるのは、滇池が中心となる滇池類型であり、滇文化とも称される。西部にあるのは、洱海が中心となる洱海類型である。滇文化は、よく発達した青銅器文化であり、その文化様式には、一種の複合文化の特徴がみられる。即ち濃厚な土着文化の特性の他に、北方草原にあるスキタイ等の文化と巴蜀文化の要素も含まれる。当該類型の晩期の墓から、前漢王朝の金印——「滇王之印」が発見されたことで、この文化は滇国の文化であると判定できる。洱海類型の文化様式にも、一種の複合文化の特徴がみられ、洱池類型と類似した土着文化の要素の他に、北方草原文化の要素がもっと顕著に現れる。この種類の文化は、おそらく司馬遷が言う「靡莫之属」の文化に属するのであてであろう。

貴州高原で青銅器文化の遺物が発見された場所も同様に殆ど高原上の小盆地である。但し、これらの盆地の面積は小さく、自然環境も雲南高原ほどよくはない。この地域の青銅器文化には、地元の土着文化特有の様式の他に、滇文化と巴蜀文化からの影響も見られる。この種の文化はおそらく夜郎国とその周辺諸民族集団の文化に属すると思われる。

洱海以西や以北の雲南西北部と雅安、涼山洲、阿坝洲、甘孜州を含めた四川西部の広大な区域に、一種の石棺葬、双耳陶罐、山形格青銅剣などを特徴とする考古学文化が広く分布している。この考古学文化は、ところによって比較的大きな差異が存在するが、中国西北地域の文化と類似する特徴もみられ、同時に比較的典型的な遊牧民文化の特徴もみられる。但し、東部の低海拔の川谷地帯では、農耕文化の要素がやや濃くみられる。この広大な区域はいくつかのブロックに分けることができ、大体『史記』に記載された犛、昆明、徙、笮都、冉駹等の民族集団が活動した区域に当たる。

3. 秦漢王朝の西南地域征服と支配

紀元前316年、秦国の南にある巴蜀両国の間に戦争がおこり、巴国は秦国に出兵支援を要請した。これに応じた秦国は大軍を派遣して南へ下り、四川盆地の北縁で蜀軍を撃ち破り、逃亡中の蜀王を殺して、蜀国を滅した。蜀国の太子は残存勢力を率いて西南へ退却していった。同年、秦軍はひき続き東へ進撃し、一挙に巴国を滅亡させた。

秦は、巴蜀両国を滅亡させた後、巴蜀両国の残存勢力がまだ比較的強い事情に対して、巴蜀に残った王室貴族を冊封し彼らを利用して原住民を統治した。一方で、巴蜀区域に大量移民を送り秦国で実施されていた郡県制を巴蜀地域にとりいれ、段階的に広く推し進める事によって、この地域の支配を強固にしていった。この政策の成功によって、以後、巴蜀区域の経済が発展し、秦の中国統一戦争に有力な支援を与えることになった。

紀元前206年、秦が滅亡した後、漢王劉邦は、巴蜀地域を基地とし、楚霸王項羽を撃ち破って漢王朝を建立した。秦の時代に、秦国が西南夷地域に対して討伐を行い、巴蜀と隣接する西南夷地域に郡県を設置し、そこを秦の支配下においた。漢の初期になると、全国の経済状況悪化、国力不足などの理由により、漢王朝は自らこれら地域に対する支配を放棄した。しかし前漢中期、漢の武帝は、即位（前141年）の後、当時の強大な国力を利用し、西南夷地域の大規模な開拓事業を二度に及び行い、その地域の大部分を支配下に置くことに成功した。

漢の武帝による西南夷に対する一回目の進軍は、前135年に始まった。最初の目的は夜郎軍を利用し、夜郎国から南越国に奇襲をかけることと、夜郎地域に郡県を設置することであった。この大規模な開拓活動でとられた手段は、主に大量の絹製品などの財物を相手国に贈ることと、夜郎国とその周辺の南夷地域および邛笮などの西夷地域を漢に帰属させ、郡県を設置することに同意させることであった。しかし、西南夷への道路を開通することが予想以上に難しく、また地元の民族による反乱も後を絶たなかった。さらに、当時、北方の匈奴からの挑発に全力を挙げて対応しなければならない事情もあったため、南夷地域の一部に犍為郡を設置しただけで、継続的な開拓活動は放棄する結果となった。

二回目の進軍は前122年に始まった。その直接の起因は、漢が大夏国（今のアフガニスタンあたり）と連合し、匈奴を打ち破ることにあった。しかし、蜀国から身毒（今のインド）を経由して大夏国に入ろうとする使者を派遣したが、その使者は途中で昆明人に殺された。そこで、漢は軍隊を派遣して昆明などの部落を攻撃し、数万人の首を斬ったが、それでも身毒への道を開通できなかった。前112年、南越が漢に離反したことに端を発し、漢は、犍為郡に駐屯する南夷軍を派遣し、南越を攻撃させようとしたが、南夷に属する且蘭の君長が遠征を欲せず、離反した。この反乱の波は速く、他の南夷と西夷に及んだ。漢は反乱を治める為に且蘭の君、邛君と笮侯などを殺し、また数万人の首を斬り落とした上で、夜郎地域に牂牁郡、邛都を中心とする地域に越嶲郡、徙，笮都夷を中心とする他に沈黎郡、冉駹夷地域に汶山郡、白馬氏地区で武都郡などを設置した。同時に自ら進んで漢に帰順した諸蛮夷の君長達に対して、例えば夜郎国の国王を夜郎王に任じたように、冊封を行った。前109年、漢は、滇の国王に使者を派遣し、従属するように説得したが、滇の国王は従属しないばかりか、滇の周辺にある勞浸、靡莫などの同姓部落を煽動し、漢の使者を妨害させた。これに対し、漢は、勞浸、靡莫を打ち破り、滇の国王に迫って投降させた後、滇国およびその周辺区域に益州郡を設置し、元滇王に冊封をお

こなって、続けて滇の民衆を支配させた。こうして、前漢武帝による大規模な西南進軍と大規模な西南開拓活動が一応終ろうとした。

後漢前期、益州郡の西にある哀牢夷が漢に内属した後、漢は、益州郡の西部の一部と哀牢の地とを合わせて永昌郡を設置した。こうして、漢の西南夷地区における領域はほぼ確定した。

秦漢帝国の西南地域での支配は、主として官位授与制冊封制と郡県制の二方式併用の形で進められた。二方式併用の支配方法が使われたのは、西南地域内においては生態環境の地域差が大きく、多様な経済類型が存在するからである。また、この地域では民族が多く、民族と民族の間に、文化や風習、社会の組織形態、経済的水準などの差異が大きく存在するため、単一の方式で支配するとすれば、大きな困難があるからであろう。これ以外に、もともとこの地域における各民族の支配勢力が強かったため、秦漢帝国は、官位授与冊封を行い、元勢力の力を利用して間接的な支配を図らざるをえなかったことも考えられる。官位授与冊封を行うと同時に、本土と同じ郡県制を段階的に実施しながら、政治文化の中心であり、経済も発達している地域に大量移民を推し進め、移民に対する郡県制支配を行い、少しずつその範囲を拡げることによって、発達した地域の民族を段階的に郡県制支配の範囲内に置いていったのである。

秦漢帝国が数百年に亘って西南地域を支配した結果、秦漢文明は西南地域へ急速に広がった。一方、当該地域の各民族の土着文化は、それぞれの程度の差こそあれ秦漢文明から強い影響を受け、変容した。とりわけ経済、文化が発達し、移民が多い盆地や平原では、強烈に変化した。これらの地域では、多くの土着文化がしだいに消えていく中で、一部の原住民は他の地域に移住してしまい、残った原住民はだんだん漢化されてしまい、最終的には、漢民族社会の中に融け込んでいった。

秦漢時代に、西南地域に居住していた民族の種類は非常に多く、由来も複雑であった。しかし、外来の漢系民族以外の民族は、当時まとめて「西南夷」と称されていた。具体的には「南夷」と「西夷」の二大民族集団に区分される。前漢中期（前2世紀後期～前1世紀前期）、中国の著名な史学者司馬遷が『史記・西南夷列伝』の中で、当時の西南民族について次のように記述している。

西南夷君長以什数，夜郎最大；其西靡莫之属以什数，滇最大；自滇以北君長以什属，邛都最大；此皆椎結，耕田，有邑居。其外西自同師以東，北至牁榆，名為嵩，昆明，皆編髮，随畜遷徙，毋常处，毋君長，地方可数千里。自嵩以東北，君長以什数，徙，笮都最大；自笮以東北，君長以什数，冉駹最大。其俗或土著，或遷徙，在蜀之西。自冉駹以東北，君長以什数，白馬最大，皆氏類也。此皆巴蜀西南外蛮夷也。

上記の一節を『史記』の別節と照らし合わせてみれば分かるように、大体四川盆地の西に住

む嵩，昆明，徙，笮都，冉駹，白馬などの民族集団は西夷と称され，四川盆地以南に住む夜郎，滇，邛都などの民族集団は南夷と称された。『漢書・地理誌』の中で，「巴蜀広漢は南夷である」と記載されている。つまり，中原民族が巴蜀地域に進入する前に，巴蜀の土着民族も大体南夷系統の民族に属していたのである。後漢の時代に，四川盆地以西の地域で，西夷系統に属する羌人の活動があったこともみられる。

民族系統からみれば，西南夷のこの二大民族集団は更に四つの民族系統に分けることができる。即ち，南夷は，主として濮系民族であり，西夷集団には夷系民族と氏系民族，羌系民族が含まれる。この四つの民族系統が西南夷に住む殆どの民族を包括している。また，南夷系統あるいは南夷系統に近い民族の中に，少数の越系民族と現在の南アジア語系統に属するモンクメール語系の民族が存在する。¹⁾ 例えば，巴国に住む共人などは越系民族に属し，後漢の永昌郡に住む閩濮人は，現在雲南に住み，南アジア言語系統に属するモンクメール語系民族の布朗（プーラン），佉，崩龍（パラウン）などの民族の祖先である可能性がある。

次に，秦漢時代の西南地域に住む四つの西南夷系民族と漢民族について具体的に論述する。

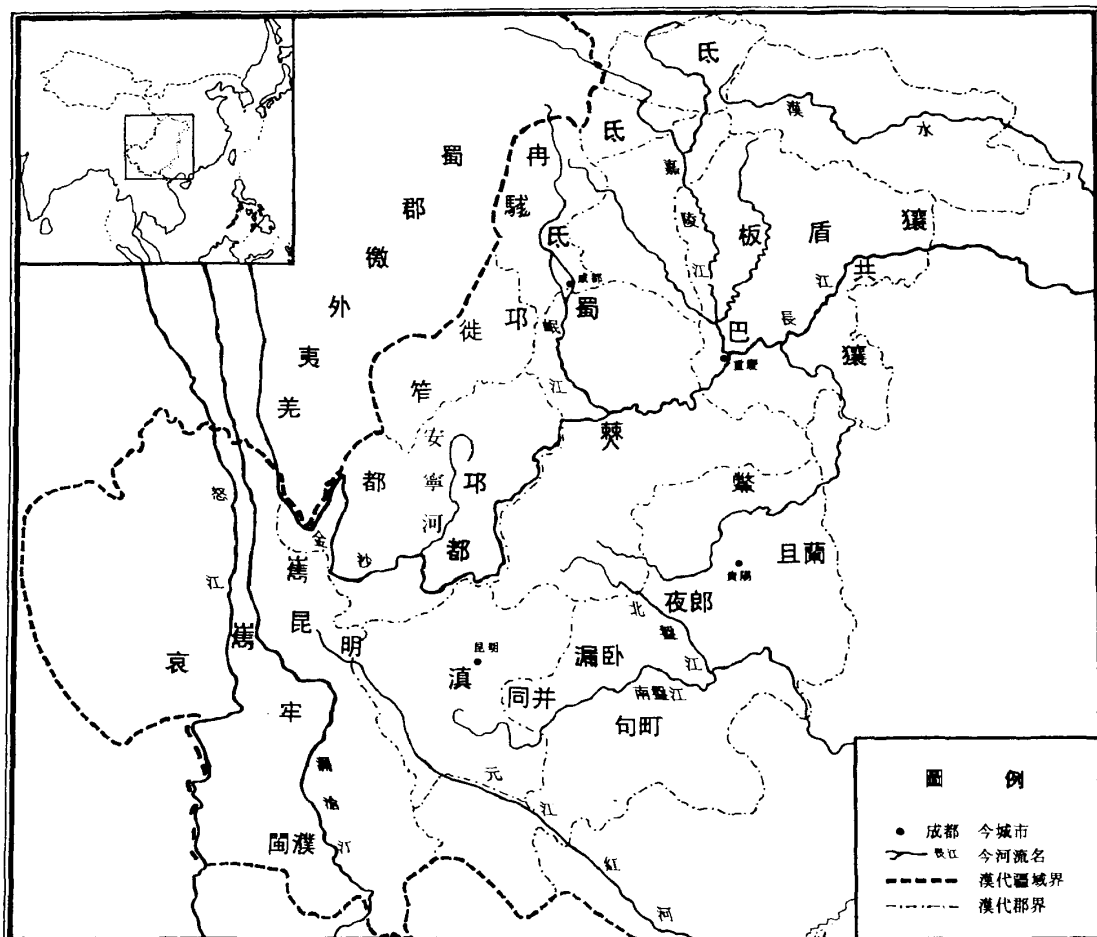


図1 秦漢時期民族分布

1) 本稿の言語の名称と言語系統は，人民出版社，1981年出版の『中国少数民族』による。

IV 濮系民族

古代、濮系民族は、中国の西南地方に住む大きな民族集団であった。その支系は多く、且つ複雑であり、内部形態の差異も大きいため、「百濮」と称される。「濮」とは、主に漢以前の称号であり、魏晉時代以後は「僚」と称された。現在の貴州、広西、雲南に散在する仡佬（コーラオ）族はルーツからすると濮、僚人とのかかわりが最も深い。仡佬族の言語は特殊であり、中国・チベット語系に属すると言われているが、まだ確定出来ていない。また、民族のルーツで言えば、濮系民族も現在中国に住む一部の壮侗語系民族の一つである。

濮人は上古時代には西南地域の東部に住む主要な原住民であった。その歴史は相当古く、伝説によれば、商の初期、即ち紀元前16世紀に、彼らが商王朝の命令を受けたことや、特産品を貢いだこともある。紀元前11世紀、濮人は、周武王の殷紂王討伐戦に参加した。西周の末期、濮人は、南方の一部の部落と連合し、周王朝と相当大規模な戦争を行った。この戦争で、周の厲王は自ら陣頭指揮をして、やっと濮人を打ち破ったと言われている。西周時代（前11～前8世紀）には、揚子江中流にある江漢平原およびその西南地域に、大勢の濮人が散居していた。西周の初年、楚人がこの地域に来てから、濮人との長期闘争が始まった。春秋の前期即ち紀元前8～前7世紀になると、楚の国力が強大になり、濮人に対する圧力が次第に増大した。濮人は土地の多くを占領された末、大勢が西南方向へ移動し始めたのである。

濮人の西南地域における分布は広範囲に及んでいたため、秦漢時代にこの地域で活動した濮人に関する文献は非常に多い。春秋時代以来、元巴国の中心は現在の重慶あたりの合川周辺にあり、ここには比較的大きな濮人部落が存在し、その首領は王と称せられたようである。そこは、戦国時代頃の巴国の墊江にあたり、巴人が進入する以前には濮人の土地であったため、もともと「濮江」と称されていた。後世の伝説によれば、巴人が進入した後の一時期には、濮人との間に激しい衝突があったという。巴国の領内の、濮人は、その人口が多だけでなく、長期に亘った自分達の言語と文化を保持していた。漢の時代になっても川東地域には依然として多くの濮人が住んでおり、このため、漢の楊雄が『蜀都賦』の中で、「東有巴賁，綿亘百濮」と記述したのであろう。

『華陽国誌・蜀誌』の記載によれば、元蜀国の領内には、漢の時代に成都の東部にあった郫県に「濮」という地名があったという。これも昔濮人が住んでいたことに関連する。

『華陽国誌・南中誌』によれば、元夜郎国の領内に、「談稿県に濮僚がある」という。つまり、漢の時代、牂牁郡に属する談稿県（現在の雲南省の富源、陸良二県の東、貴州省と隣接する地帯）に濮僚人がいたのである。

邛都地域について、『漢書・地理誌』の記載では、漢の時代、越嵩郡青蛉県（今の雲南省の

北部にある永仁県、大姚県あたり）に「仆水」（今の金沙江の支流）があるとされ、この辺りに、濮人が住んでいたことが示されている。また、『華陽国誌・蜀誌』では、越嵩郡会無県（今の四川省涼山州会東県）から「瀘水（今の金沙江）を渡り、堂狼県に住む。元濮人の村があり、今、濮人の塚がある……」という記載がある。堂狼県は即ち現在雲南北部の会沢県東部、東川と禄勛北部の金沙江南岸にある川谷地帯に当たる。ここから、金沙江流域の川谷地帯に昔濮人が多く住んでいたことが分かる。

巴（苴）

巴人とは、主に巴国で支配的立場に立つ民族のことを指す。巴人に関する文献資料は、稀であるが、ここ数十年来、四川東部あたりで巴人の文物と判定された出土文物は少なくない。我々は、これらの文物の特徴にもとづき、既に解明した古代民族の特徴と相照らしてみることによって、その民族の属性関係を確定することができる。

古代民族の髪型は、その民族系統を分別するための一つの根拠となる。四川北部、広元にある昭化宝輪院および重慶付近の巴県冬笋坝にある船棺葬から出土した銅器の上には、錘形の髪型が施された人頭符号がよくみられる。古代中原民族では、この種の髪型を「椎髻」と称し、濮系民族の持つ典型的な髪型であった。ここから、巴人も、滇、夜郎、邛都などの民族と同様に、『史記・西南夷列伝』の記載で区分された「椎髻」の範囲に入ることが分かる。

住居について、『華陽国誌』の記載では、今の重慶に当たる江州など揚子江沿岸あたりに、幹欄式の建築が多いという。現在重慶市博物館に所蔵され、戦国から前漢までの間のものとされた銅諄子（打楽器の一種）の上にも、「幹欄」式の家屋図案をみることができる。我々は、巴族の建築はこれに類似すると推測している。「幹欄」というのは、竹と木で作られた一種の二層構造の家屋を指す。高床式で底部に支えがあり、家は地面から高く離れているため、蛇や野獣等の侵入と湿気から守られる。これは、新石器時代晩期から始まり、南方民族地域でよくみられる建築様式であり、黄河流域の伝統的な竪穴式建築とは異なる。

一般に、戦国時代に巴人を支配した民族は廩君蛮であると言われている。『世本』の中に、廩君蛮についての伝説があり、これは多分巴人が自分達のルーツと早期の歴史について追憶したものであろう。『世本』は今既に散失したが、他の書籍に一部が保留されている。内容は、次のように記されている。

廩君種不知何代。（宋代『太平寰宇記』168引）

巴郡南郡蛮，本有五姓：巴氏，樊氏，譚氏，相氏，鄭氏。皆出于武落鍾離山。其山有赤黑二穴，巴氏之子生于赤穴，四姓之子皆姓黑穴。未有君長，俱事鬼神，乃共擲劍于石穴，

約能中者，奉以為君。巴氏子務相獨中之，衆皆嘆。又令各乘土船，約能浮者，當以為君。余姓悉沉惟務相獨浮，因共立之，是為廩君。乃乘土船，從夷水至塩陽。塩水有神女，謂廩君曰「此地廣大，魚塩所出，愿留共居」。廩君不許。塩神暮輒來取宿，旦即化為虫，与諸虫群飛，掩蔽日光，天地晦冥。積十余日，廩君伺其便，因射殺之，天地開明。廩君于是君乎夷城，四姓皆臣之。廩君死，魂魄世為白虎。巴氏以虎飲人血，遂以人祠焉。（『後漢書・南蛮西南夷列伝』の引用による）

この記載には神話伝説的な要素が含まれるが、我々はその中から、巴人の起源地、早期の歴史と彼らの風俗習慣の一部を知ることができ、巴人の民族起源と民族属性を研究するには、重要な資料であると思われる。

巴人が最初に住んでいたのは武落鍾離山であり、今の湖北省長陽県あたりであると言われている。夷水は、今の湖北省西南部にある清江に当たる。²⁾ 総じて言えば、巴人の起源地は湖北省西南部の山地にはほぼ確定することができる。廩君の時代に関しては、詳細に知るすべはないが、春秋戦国以前、湖北省西南部はずっと百濮の群居する区域であったことは分かっている。

『世本』に記載された「廩君が土船に乗る」という伝説および発掘された多くの船棺からみれば、巴人は、川の近くに住み、川や水のことを熟知する民族であり、船棺はもともと実際に使われた獨木舟であることが分かる。また、生前、乗物として使われた舟が死後そのまま棺になることから、舟が彼らの生活の中で重要な存在であったことも窺われる。

巴人と濮人は、古籍のなかでよく「巴濮」と称されるように、文化も似ているし、言語も大体同じである。また、漢の時代の『方言』では、「巴，濮之人，自称『娒』」という記載があるため、巴人は濮系民族であり、「百濮」の一支流であることに間違いないであろう。

秦が巴蜀を滅して以後、秦漢時代における巴人の発展と変遷状況は地域によってそれぞれ異なっており複雑である。川東地域で言えば、中原民族に融けこんだ一部の巴人を除けば、他の巴人は、漢時代の間ずっと民族の文化伝統を保っていて、「蛮」と称され、魏晉時代の僚人の起源の一つとなった。後漢の時代、川東地域に住む一部の巴人が蜂起に失敗した後、江夏郡（今の湖北省江漢平原あたり）に強制移住させられた。これらの巴人は、紀元5世紀に至っても、文化的に自民族の伝統を保っていたらしい。

苴人は、四川盆地の北部に分布し、実際は巴人の一支流である。『史記・張儀列伝』には「苴蜀相攻撃」という記載がある。「索引」では「苴は巴と発音する。巴と蜀の夷人が互いに攻撃したことを言う」と注され、苴人は即ち巴人であると解釈している。『華陽国誌・蜀誌』に苴侯がかつて葭萌地方の官吏に任ぜられたとの記載がある。葭萌は現在の四川省北部広元昭化

2) 『水経注』巻37：「夷水・即俱山清江也。……昔廩君浮土舟于夷水，据捍関而王巴。」

あたりである。昭化宝輪院から出土した大量の船棺葬は、苴人の遺物である可能性が大きい。船棺葬から発見された文物が、重慶巴県冬笋坝船棺葬から発見された文物と完全に一致していることから、二つの民族は同一民族であると説明できる。

蜀（杜宇・開明）

蜀人とは、主に蜀国で支配的地位に立つ民族のことを指す。蜀国の支配集団は時期によってそれぞれ異なる民族に属する為、具体的に区別する必要がある。

比較的集中して蜀の歴史を記載したのは、漢の時代の楊雄が書いた『蜀王本紀』であると言われている。この本は既に散逸したが、『全漢文』第53巻の引用に、次のような一節がある。

蜀之先称王者蚕叢，柏濩，魚鳧，開明，是時人萌椎髻左衽，不曉文字，未有礼樂。從開明以上至蚕叢積三万四千歲。

この節から、蜀国がいくつかの王朝を経たことが分かる。また、蜀の歴史の中に、開明以前に杜宇氏の時代があった。『蜀王本紀』の中で、蚕叢，柏濩，魚鳧などを記述した後，続けて杜宇氏の起源伝説やその業績についての記述がみられる。

後有一男子名曰杜宇，從天墜止朱提（今雲南昭通）。有一女子名利，從江源（在成都南）井中出，為杜宇妻。及自立為蜀王，号曰望帝，治汶山下，邑曰郫，化名往往複出。

この伝説から、杜宇氏は天から降りてきたこと，早期活動地域は朱提あたり（現在の雲南昭通地区）であり，前文で述べた濮系民族に属する可能性があること，以後，杜宇氏は北の川西平原に進入し，蜀国を支配したことなどが窺える。杜宇氏が蜀国を支配していた時代については，西周から春秋中期までの間であると推測できる〔童 1979〕。

蜀国の最後の王朝——開明氏の民族起源について、『蜀王本紀』の中で次のような神話伝説がある。

荆有一人名鰲靈，其尸亡去，荆人求之不得。鰲靈尸随江水上至郫，遂活，与望帝（即杜宇氏）相見。望帝以鰲靈為相。時玉山出水，若堯之洪水，望帝不能治，使鰲靈決玉山，民得安堵。鰲靈治水去後，望帝与妻通，漸愧，自以為德薄不如鰲靈，乃委国受之而去，如堯之禪讓。鰲靈即位，号曰開明帝。

この記述からみれば，開明氏はたぶん，川東から移住してきた民族であり，水や川のことを

熟知していた。以後、成都平原に進入して杜宇氏に仕える臣下となり、洪水を治め、成都平原を開発する過程で、功績があった。開明氏の勢力はしだいに強くなり、最後に杜宇氏を追い出して川西地域を支配するようになったのであろう。

開明氏の民族属性について、古文献に「荆人」であるとする説がある。荆人は川東地域と湖北西部あたりの住民であると言えるため、開明氏は巴人に属する可能性が最も大きい。歴史的記載から見れば、『華陽国誌・蜀誌』に「蜀王はその弟を葭萌に官位を封じ、苴侯と称する」という記述がある。前文で論証したように、苴は即ち巴のことである。蜀王の弟を苴侯と称したことから、逆に蜀王本人も巴人である筈ということが言える。川東にある閬中などの地域には、驚霊に関する遺跡がある。これも、驚霊が巴人である証拠になる。開明氏の出身地はおそらく閬中辺りであるから、そこに廟を建て祭祀されているのであろう。

考古資料からみれば、戦国時代の蜀地文化は、西周時代の蜀地文化との間に大きな差異があるが、戦国時代の巴地文化とは一致している。例えば、両地域の船棺葬具、青銅容器、武器、青銅器の装飾模様、文字に近い図形符号などは皆一致している。また、蜀地の郫県と巴地の万県から出土した銘文戈からみても、両地域の文字は同じである。これらは、両地域における支配者の民族属性が同一であることを暗示している。

秦が蜀を滅亡させた後、地域に残った一部の蜀人は、前漢時代の晩期になって、物質的にも、文化の面でもすでに徐々に外来の漢系民族と融合していった。別の一部の蜀人は、居住地である平原・川谷地帯から、付近の山間地帯や秦の支配が及ばなかった南方に移住した。例えば、四川省の樂山市以南の山地や川西南の安寧川谷地帯に一部の蜀人が、南と西南方向へ移った跡形を残している。さらに一部の蜀人は、蜀王に率いられ、今のベトナム北部あたりまで移住し、新しい国家を創立したのである。『水経・葉榆河注』、『交州外域記』には次のように記されている。「交趾には昔郡県がまだない時、土地に雒田があり、その田は潮水の上下に伴って移動する。民はそれを開墾し、食糧を得るため、雒民と称される。雒王、雒侯を設け、諸郡県を治める。県の多い郡では雒将を設け、銅印青綬を持つ。その後、蜀王の息子が三万の兵を率いて、雒王、雒侯を討伐した。雒将は征服された。この後、蜀王の息子が安陽王と称される」。漢の時代、交趾郡の中心区域は、即ち今のベトナム北部にあるハノイ一帯である。

板盾

板盾蛮は、川東区域の元巴国境内に住む古い土着民族の一種である。四川盆地の東北部にある今の渠県あたりを中心に分布し、東部は四川盆地の東縁にまで及ぶ。³⁾『輿地紀勝』162巻に

3) 現在の万県と雲陽県に、漢王朝が賁人を封ずる時の銅印「漢婦義賁邑侯」と「婦義賁義侯」が出土した。

は次のように記載されている。

巴西宕渠 [現在の渠県]，其人勇健好歌舞，鄰山，險阻相次。古之國都也。

賁は即ち板盾蛮のことである。『後漢書・南蛮西南夷列伝』に次のように記載されている。

板盾蛮夷者，秦昭襄王時有一白虎，常從郡虎數游秦，蜀，巴，漢中境，傷害千余人。昭王乃重募國中有能殺虎者，賞邑萬家，金百鎰。時有巴郡閬中夷人，能作白竹之弩，乃登樓射殺白虎。昭王嘉之，而以其夷人，不欲加封，乃刻石盟要，復夷人頃田不租，十妻不算：傷人者論，殺人者得以俛錢贖死。盟曰「秦犯夷，輸黃龍一雙；夷犯秦，輸清酒一鍾」。夷人安之。

至高祖為漢王，發夷人還伐三秦。秦地既定，乃遣還巴中，復其渠帥羅，朴，咎，鄂，度，夕，龔七姓，不輸租賦，余戶乃歲入賁錢，口四十。世號為板盾蛮夷。

この民族が「賁」と命名されたのは、彼らから上納された税金が「賁錢」と呼ばれたからである。譙周の『巴記』では、「夷人は毎年賁錢を納付し、一人あたりに四十である。この人たちのことを賁民と呼ぶ」と記される。これは多分漢人の彼らに対する呼び方で、秦漢時代から始まったのであろう。「板盾蛮」の名称については、彼らが「盾」という武器の使用に長じていたからである。巴人と賁人は多分長期に亘って互いに敵視していた民族であろう。それゆえに巴人の首領は「廩君は死後その魂が白い虎に化す」というのに対して、板盾蛮は「専ら白い虎を射る事を仕事とする」となったのであろう。

板盾蛮は、また、魏晉以後の僚人の起源の一つである。唐の時代、人々は、板盾蛮から変遷した僚人を南平僚と称した。宋の時代になるとまた渝州蛮とも称した。⁴⁾『新唐書』第222巻では、「南平僚」の風俗について次のように記載されている。

南平僚，東距智州，南屬渝州，西接南州，北涪州，戸四千余。多瘴病。山有毒草，沙虱，蝮蛇，人樓居，梯而上，名為幹欄。婦人橫布二幅，穿中貫其首，号曰通裙。美髮髻，垂于後。竹筒三寸，斜穿其耳，貴者飾以珠当。俗女多男少，婦人任役。昏（婚）法，女先以貨求男，貧者無以嫁，則賣為婢。男子左衽，露髮，徒跣。

宋の時代まで、板盾蛮は民族特有の文化を保持していた。『太平寰宇記』第136巻では、「渝

4)『宋史』第496巻では、「渝州蛮とは、古い板盾七姓蛮のことで、唐南平僚であり」と記述されている。

州風俗」について次のように記載されている。

大凡蜀人風俗同一。然辺蛮界鄉村有僚戸即異也。今渝之山谷中有狼柔鄉，俗構屋高樹，謂之閣蘭（幹欄）。不解絲竹，唯吹銅鼓，視木葉以別四時。父子同諱，夫妻共名，祭鬼以祈福也。

これらの風俗は、銅鼓を叩くのが前漢以後に生まれた文化であることを除けば、大体板盾蛮が残した風俗であるとみてよい。

獠

獠は、元巴国境内に住む土着民族である。その多くは、現在の四川省東部と湖北省西部あたりに分布し、三峡地区に最も多い。漢の時代を通してずっとこの地域に住んでいた。⁵⁾ 獠人は濮系民族に属し、魏晉以後の僚人の起源の一つである。『太平寰宇記』第76巻では次のように記載されている。

有獠人言語与夏人（即漢人）不同，嫁娶但鼓笛而已。遭喪乃立竿懸布置于門庭，殯于別所。至其体燥，以木函盛置于山穴中。李膺記云：此四郡獠也。又有夷人与獠類。又有僚人，与獠，夷相同，但名字有異而已。

この記載から、獠人は、崖葬を行う点で、濮系民族に属することが分かる。獠人は巴人と共に、濮系民族に属するため、文化の面で類似する所が多い。三峡地域に発見された戦国、漢の時代の崖葬は、獠人の遺物である [羅 1997]。随葬品からみれば、崖葬から出土された獠人のものと船棺葬から出土された巴人のものは、同一性質の文化に属している。但し、葬俗では巴人と獠人との間に大きな違いが存在している。巴人は土葬を行い、葬具は船棺である。一方、獠人は盛んに崖葬を行い、その後中古時代、四川、湖北、湖南、貴州の辺境あたりと四川南部の僚人区域ではこの風習が依然として保たれていた。

獠

獠人は、戦国時代以前に今の四川省南部、揚子江兩岸の宜賓地区、瀘州市および涼山州東部と雲南省東北部などに住む土着民族である。分布範囲は大体漢の犍為郡の郡内である。『漢書・地理誌』の「犍道」に、応劭が「元獠侯国である」と解釈している。獠人は実際濮人のこ

5) 『華陽国誌・巴誌』等の文献記載による。

とであり、古代、僰と濮は同音異字である。僰人は川東の濮人と同様に魏晉時代の僚人の起源の一つである。

戦国時代、僰人は蜀国の臣民であり、秦が巴蜀を滅した後には秦に支配された。秦漢時代、中原民族がこの地域に不断に移住してくるにつれて、一部の僰人は南へ移住した。『華陽国誌・蜀誌』の中で、僰道県について「治馬湖に江が交差し、水は越嶲まで流れる。もともと僰人が住んでいた。これは『秦紀』で言った僰童の富の理由である。漢民が多くなってから、段々別のところに移住した」と記されている。こうして、川南に住む僰人の大部分は中原民族との区別が日一日となくなっていく。秦漢時代において「西南夷」に行くには、大体僰道を出発地としていた。前漢中期、司馬遷が『史記・西南夷列伝』を書いた時、この地域に住む僰人のことを独立して記述はしていない。

『説文解字』では、「僰は犍為蛮夷のことである。意味は、人に従い音は棘に従う」と記される。『水経注・江水』では『地理風俗記』を引用して「僰は夷の中で最仁の部落である。人道があるため名に人という文字がつく」。「最仁」とは即ち「最も人道がある」ことであり、実際はこの民族の文化レベルが比較的高いと言っているのである。僰人の経済については、農業が主である。『太平御覧』第791巻では、『永昌郡伝』を引用して「朱提郡は犍為の南千八百里の所にあり、朱提県を管轄する。川中を五、六十里ほど縦横する。大きな泉のある池があり、千頃池と名づけられる。又、この池の水が稻田の灌漑用水として利用されている。僰道と隣接している」と記されている。朱提は、即ち今の雲南省昭通であり、漢の時代には犍為郡に属し、僰人の住居地区であった。稲作以外に、僰人はまた果園の経営や換金作物などをつくっていた。

『太平御覧』第197巻では、『郡国誌』を引用して、「西夷にあるレイシの園に雇われた人の中で、僰人が最仁である。このため昔から僰童の富という言い方がある。僰人はレイシ作りを業とし、園に一万株のレイシの木があり、年百五十斛は採れる」と記され、『華陽国・蜀誌』では、「僰道県、有荔枝、姜、薑」と記される。僰人の風俗習慣については、『天下郡国利病書』第69巻で、次のように記される。

有姓氏、用白練纏頭、衣裳青碧、背領袂縁俱刺文綉。裳褲覆膝、亦織班帶以為行纏。尝佩双刀、善使勁弩・女縮髮撮髻（即椎髻）、飾以簪、压衫之前後左右文綉絢爛、長裙細摺、膝下亦刺文綉・行纏雜以青紫、出則著草履・……婚則論財、喪座戚鄰咸聚、挝鼓作樂至夜、男女雜還。自有番書、卜日不同于中国。

この記述は、後世のことであるが、古代社会の中で、少数民族地域の生産形態が長期に亘って停滞状態に陥っていた状況があったから、秦漢時代の僰人の事情を推測するには参考にな

る。

僰人の社会では、漢の時代に到っても奴隸売買制度が盛んに行われていた。僰人は、よく巴蜀区域に奴隸を輸出していた。『史記・西南夷列伝』では、前漢の初め、政府が西南夷への通路を閉鎖したが、「巴蜀の民はこっそり商売で笮馬や僰人の雇い人、牦牛などを手に入れ、それで豊かになった」と記されている。また、『索隠』では、服虔の言葉を引用して「古い京には、僰人の女中がいる」と記されている。これらの僰僮、僰婢は、皆売買された僰人奴隸であろう。

夜郎

夜郎をはじめとする民族集団は、今の貴州省西部の貴州高原およびその周辺地区に分布する。その分布は、漢の時代の牂柯郡の範囲にほぼ相当する。そこには夜郎の他に、句町、且蘭、漏臥、同并、獢などがあったと考えられる。民族系統から見れば、いずれも濮系民族に属し、伝統的な南方民族である。『華陽国誌・南中誌』では、漢の武帝が夜郎王を斬り、「その後、夷と濮は城に集まった、竹王は人間の血から生まれたのではないことを訴え、彼に後継者を立てることを求めた」と記される。又、漢の時代の句町県について、「古い句町王国の名である。それは（漢武帝当時）濮王から設置された。濮王は毋と申す」とされている。又、談稿県に「濮僚がいる」と記される。これらはいずれも、夜郎をはじめとする民族集団は濮系民族に属することを説明している。

『後漢書・南蛮西南夷列伝』の中に、夜郎人の起源について、次のような神話伝説がある。

夜郎者、初有女子浣于遯水，有三節大竹流入足間，聞其中有号声，剖竹視之，得一男兒，婦而養之。及長，有才武，自立為夜郎侯，以竹為姓。武帝元鼎六年，平南夷，為牂柯郡，夜郎侯迎降，天子賜其王印綬。後遂殺之。夷僚咸以竹王非血氣所生，甚重之，求為立後。牂柯太守吳霸以聞，天子乃封其三子為侯。死，配食其父。今夜郎県有竹王三郎神是也。

ここから、夜郎人は竹を崇拝し、夜郎王が竹から生まれたことを信じて「竹王」と尊称されていたことが分かる。

古代文献の記載と考古学上で発見された実物から、我々は又、次のようなことを知ることが出来る。夜郎をはじめとする民族集団の髪型は、椎髻である。住居形式は定住であり、栽培作物は水田稲作を主として、また鵜を使った漁業や牧畜業もあり、家畜は豚と牛等がいる。家屋は幹欄式建築である。銅鼓を多く使う。葬俗は土葬であり、その中に銅鼓葬もある。巫、鬼、禁忌などの俗信が好まれる。競舟、羽人舞、剽牛などの風習もある。

滇

滇をはじめとする糜莫類の民族集団は、ほぼ今の雲南省中北部の雲南高原に分布し、中心的地域は昆明盆地あたりである。民族系統から見れば、いずれも漢系民族に属する。

滇国の支配層民族の属性について、現在、論争がおこっている。南へ下った北方民族に属すると考える説があるが、筆者は、南方の土着民族即ち漢系民族に属すると考えている。『史記』や『漢書』と『華陽国誌』などの文献の中で、「滇濮」、「滇僰」というふうに併称することがよくあるので、濮というのは、古代ではわりと普遍的な見方であったことが分かる。夜郎が漢系に属するとすれば、滇も濮人であるはずという解釈は合理的であろう。宋の時代の楽史はこれらの民族属性を纏めて、「夜郎、滇池、邛都の人は皆、椎髻をし、服を左前に着、邑に群居し、農業を知る。土地は平原であり、稲田がある。遊蕩する習慣があり、唄が好きで、牂柯の風習と少し似ている」と記載される。この記載からも、これらの民族を同一類の民族であると言えることができる。

古代文献を通じて、次のようなことが分かる。滇をはじめとする民族集団の髪型は椎髻である。住居形式は定住式であり、且つ村に集まって住む習慣がある。経済は農耕を主とし、栽培作物は主に水稻である。これらは考古学上発見されたものと一致する。このほかに、出土した文物から、次のようなことも分かる。滇人は農業以外に、牧畜や鵜を使った漁業も行い、牛が重要な家畜である。貫頭衣を着、幹欄式家屋に住み、銅鼓を大量に使用する。また、競舟、羽人舞、剽牛、蛇崇拜などの風習がある。これらも皆南方民族に属する特徴である。

滇人が北方民族に属するという説の由来は、主に滇国領内の山地高原にも昆明などの民族が住んでいたことにある。しかし、文献と出土した文物を分析した結果から見れば、昆明などの山地民族は被支配民族であると言えることができる。

邛都

邛都をはじめとする民族集団は、四川省西南涼山州境内の安寧河流域あたりに分布する。これはほぼ漢の越嶲郡の東部地区に当たる。民族属性から見れば、彼らも夜郎、滇と同様に漢民族に属する。

「邛都」とは、多分この民族の自称であろう。『後漢書・南蛮西南夷列伝』の中で、次のように記述される。

邛都夷者、武帝所開、以為邛都県。無幾而地陷為淤澤、因名為邛池、南人衣為邛河。後複反叛。元鼎六年、漢兵自越水伐之、以為越嶲郡。其土地平原、有稲田。……俗多遊蕩、而喜謳歌、略與牂柯相類。

注意に値するのは、司馬遷が『史記・西南夷列伝』の中で、夜郎、滇、邛都を同一種類にまとめ、彼らの髪型（椎髻）、経済類型（稲作農耕）と社会組織（村に集まって居住し、君長に管理される方式）などが一致していることを指摘して、同一民族系統であることを明確に暗示したということである。また、『後漢書・南蛮西南夷列伝』でも、邛都の風俗は「牂柯と類似する」と言っている。この牂柯とは、漢武帝が夜郎国を征服した後に設けられた牂柯郡のことであり、主要な住民は濮系民族である。

漢の時代における牂柯と越嶲の民族情況は、漢以後、二百余年の間変化が極めて少ないようである。『宋書・肖惠開伝』の記載によれば、紀元464年、肖惠開が益州と寧州の刺史であった時、「牂柯、越嶲を征服して内地とする。蛮濮を討伐し、土地を拓き、租を増やす」ことを図ったとある。南北朝の時、濮人は依然としてこの辺りの主要民族であることが分かる。

邛都が濮系民族であることは、文献記載以外に、発掘された文物もその証拠となる。『華陽国誌・蜀誌』では、会無県（今の西昌会理県）から東の区域について、「古い濮人の邑である。今は濮人の塚があり、戸を閉じない。その穴の中に碧珠が多くあるが、取ってはいけぬ。取ると不祥事に会うからである」と記されている。この「戸を閉じない」、「碧珠がある」という濮人の塚は多分涼山区域に広く分存する大石墓であろう。この種の墓が存在した時代およびその分布地区のいずれも邛都の活動と一致しており、出入可能な墓門が確かにある。「碧珠」（緑松石あるいはその他の玉珠）も墓の中でよく見られる随葬物である。大石墓から出土した稲の殻と稲藁の痕跡は、邛都に「稲田がある」という記載と一致している。

哀牢

哀牢人は、代々今の雲南省保山の西、南に住む土着民であり、濮系民族に属する。前漢以前、昆明人の阻止によって、哀牢人はずっと漢王朝と直接的な接触をしなかったため、後漢になってから初めて漢人に知られるようになったのである。哀牢人の起源について、『後漢書・南蛮西南夷列伝』の中で次のように記載される。

哀牢夷者、其先有婦人名沙臺、居于牢山。嘗捕魚水中、触沈木若有感、因懷妊、十月、産子男十人。後沈木化為龍、出水上。沙臺聞龍語曰「若為我生子、今悉何在」。九子見龍驚走、独小子不能去、背龍而坐、龍因舐之。其母鳥語、謂背為九、謂坐為隆、因名子曰九隆。及後長大、諸兄以九隆能為父所舐而黠、遂共推以為王。後牢山下有一夫一婦、複生十女子、九隆兄弟皆娶以為妻、後漸相滋長。種人皆刻画其身、象龍文、衣皆著尾、九龍死、世々相繼。乃分置小王、往々邑居、散在溪谷。絶域荒外、山川阻深、生人以来、未嘗交通中国。

この哀牢人に関する起源神話から、哀牢人は古い土着住民であり、伝説上は龍の子孫であり、龍崇拝の風習を持つことが分かる。

『後漢書』、『華陽国誌』、『風俗通』、『永昌郡伝』などの文献によって、哀牢人は、言語は濮系民族と同じであり、王や君長を持ち、多くは村に集まって生活し、山林の中にある溪谷の水辺に住む農耕民族であり、稲作の他に麻を栽培し、蚕を飼っていたことが分かる。これらはいずれも、夜郎、邛都などの濮系民族に似ている。また、かれらは紡績や刺繍、染めなどに長じ、織った麻布が有名で、貫頭衣を着る。龍の模様に似たような入れ墨をし、鼻に穴をあけて飾りをつけ、耳に穴をあけて肩まで垂らす長い飾りをつけ、首領、王者であれば、耳飾りは肩の下まで垂らすなどの風習を持つことが分かっている。

以上、西南地域における秦漢時代の濮系民族を個別に検討した。ここで、『史記』『漢書』、『後漢書』、『華陽国誌』、桓譚の『新論』、応劭の『風俗通』、『永昌郡伝』などの文献記載および考古学上の発見によって、秦漢時代における濮系民族に普遍的な意味を持つ主要文化の特徴を纏めることが出来る。すなわち、髪型は椎髻であり、住居の多くは水辺に近い、低くて比較的平坦な所にあり、定住して村に集居し、稲作農耕を営み、水牛、黄牛、豚、鶏などを飼い、鵝を使った漁業を行い、麻布を織ることに長じ、幹欄式建築の住居で、土葬を中心に、木棺、船棺、銅鼓葬、大石墓、崖葬など多様な埋葬習俗を持つ。また、多くの集団では蛇崇拝、銅鼓、桶型裙、貫頭衣、入れ墨、競舟、羽人舞、剽牛、凿齒、獵頭、鼻飲、飛頭など比較的特殊な風習を持つ。これらは殆ど南方民族の文化特徴であると同時に、南方地域および東南アジア地域に住む多くの民族の文化特徴に類似する所もある。

V 夷系民族

「夷」は、西南地域における非漢民族集団の全体に対する呼称である以外に、特に西夷に属する夷系民族のことを指す〔蒙 1985〕。西南地域における各種夷系民族の概況について、『華陽国誌・蜀誌』では、次のように記される。

笮，笮夷也。汶山曰夷，南中曰昆明，漢嘉，越嵩曰笮，蜀曰邛，皆夷種也。

ここで「皆夷種也」というのは、これらの民族の系統は皆同じ、即ち夷系民族であることを指している。汶山「夷」とは、「冉駹」のことを指す。「邛」とは、蜀郡に住む、「夷種」のことを指す。これら民族の風習は、「編髮で、畜と共に移動し、定住せず、君長を持たない」といった風習を持つ昆明に似ているが、「椎髻で、田を耕し、邑に群居する」夜郎、滇と邛都な

どとははっきり異なっている。このため、濮系民族の邛都と夷系民族の邛とを混同して議論してはならない。魏晉の時代でも、依然として夷系民族のことを一文字で「夷」あるいは「叟」と称している。秦漢時代の夷系民族は、現在藏緬語を話す民族と彝語を話す民族の前代民族であり、現在四川省西部に分布する藏族の一支流—嘉戎人の主要起源の一つでもある。

夷系民族の最初の起源地について、古代文献を通じて求めることはもう不可能であるが、現在の彝語民族の起源伝説からみれば、かれらの起源地は、今の四川省西部、甘孜州あたりであり、その中で、彝族の起源地を四川地域では最高峰と言われる貢嘎山の周辺地区に確定することができる〔同上書〕。

次に、秦漢時代における夷系各民族について、逐一検討する。

嵩、昆明

嵩、昆明をはじめとする民族集団は、秦代以前、大体洱海を中心とする雲南高原西部にある広い山原地帯に分布していた。この山原地帯は、横断山脈の南端に位置し、大体前漢の益州郡西部に当たる。その中で、嵩は昆明の西と北に分布し、一部は越嵩郡境内に分布していたと思われる。『史記・西南夷列伝』では、「その外に、西側は同師まで至り、北側は牂牁まで至る。その名は嵩、昆明……分布地域は数千里にも及ぶ」と記される。漢の支配に入って、昆明人はしだいに東へ移住しはじめた。前漢中期、昆明人は主に雲南高原西部および中部のある地区に集住していた。後漢初年になると、昆明人はすでに雲南高原東部の滇池周辺地区に数多く移住してきた。後漢以後、また雲南東北部と貴州西部のあたりにも昆明人の営みがみられる。1939年雲南昭通で、「漢叟邑長」という銅印が発掘された。昆明人は、人口が多く、分布範囲が広いため、後漢時代では、夷系民族の中の「大種」とであると見られていた。普通、昆明人は現在の彝族の先民族であると言われている。

『史記・西南夷列伝』では、また、嵩、昆明は「皆編髪であり、畜と共に移動し、定住せず、君長を持たない。分布地域は数千里にも及ぶ」と記される。ここからかれらは、編髪民族に属し、経済類型は典型的な遊牧経済であり、家畜を連れて移動し、固定的な住居はないこと、前漢中期前後になってもまだ君長あるいは首領を持たず、統合されない部落社会の段階にあるということが分かる。考古学の研究によれば、数多くの昆明人部落は滇王の臣民として、貢を納めており、一部の昆明人は、前漢中期以前の滇国境内に分布していた。かれらは、滇国の中で被支配民族であり、主に山地に住み、牧畜業に従事していた。しかし、漢帝国の勢力がこの地区に進入してから、昆明人の社会にも分化が発生し、君長も現れた。例えば、後漢初年、「邪龍県〔今洱海南のあたり〕昆明夷鹵承」が漢の要請に応じて、種人を率いて哀牢人と戦ったことで、後漢王朝に「破虜旁邑侯」に封ぜられたこともあった。

徙，邛，笮，（旄牛徼外夷）

徙と笮については、『史記・西南夷列伝』の中で、「嵩の東北にある。君長を十で数えれば，徙，笮都は最大である……その風習では，定住式があれば，移動住居式もある。蜀の西に位置する」と記される。古代文献の中では，笮人は「笮」と呼ばれると同時に「笮都」とも呼ばれる。漢の時代，「人が集まる所を都と言」ったから，「笮都」は即ち笮人の住居という意味である。

徙はまた「斯榆」とも称し，前漢時代によく使われた呼称である。徙と斯の古代の発音は同じである。後漢になると，徙はよく「斯夷」，「斯叟」あるいは「叟」と呼ばれるようになる。例えば，『華陽国誌・南中誌』では，「夷人の大種は昆と呼ばれ，小種は叟と呼ぶ」というふうに記されている。ここから，徙は，昆明などの民族と共に同一の大きな民族集団に属しているが，徙の人口が相対的に少ないため，夷系民族の中の小種であることが分かる。

秦が巴蜀に進入する以前，川西平原の西南縁，臨邛（今の邛峽あたり）以南に住む夷系民族は邛と称される。『華陽国誌・蜀誌』では，臨邛県について「もともと邛民あり。秦始皇は上郡よりあそこに移民した」と記載される。この種の邛人については，司馬遷はおそらくそれが小集団であったために取りあげなかった。しかし『華陽国誌・蜀誌』には本章のはじめの引用文（333ページ）に見られるような解釈がなされている。

徙，笮と邛は，よく似た民族であるが，分布する地域は異なる。『史記・西南夷列伝』集解引，徐広の説は「徙は漢嘉にある。笮の音は昨と同じ，越嵩にある」である。已に論述したように，越嵩郡東部は邛都夷が分布する地区であり，笮人は邛都夷の西に分布する。例えば，越嵩郡西部では，笮人と関係する県名に，笮秦，定笮，大笮などがある。『漢書・西南夷南粵朝鮮伝』では，また，漢武帝が元鼎六年に笮都夷を治めて沈黎郡を開置したと記される。沈黎郡の郡治は笮都県（今の漢源県東南）であり，当時の沈黎郡の南部に位置し，越嵩郡と隣接している。漢嘉県の県治は，今の天全県に当たり，沈黎郡の西北部に位置する。邛人は，臨邛以南から沈黎郡東北部までの間に分布する。このため，総じて言えば，この三民族の活動中心地は大体今の涼山州と雅安地区にあり，北部は川西平原に隣接する。この地区にある蘆山県で1983年に漢が蛮夷を封じた銅印が出土した。印文は「漢叟仟長」，「漢夷土部」である。

古代における邛と笮都との境界線は，大体今の天全嶺を境とし，笮都はその南，邛は北に分布する。『華陽国誌・蜀誌』では「雅州の邛峽山の名は邛笮山と呼ぶ。昔は邛人地区と笮人地区の境とされる」と記載される。邛峽山は，現在泥巴山と称され，漢源県と榮經県との境に位置している。

徙と笮の風習について，『華陽国誌・漢中誌』では，武都に「麻田氏叟があり，そこに羌民が多い。……百頃の大いなる池があり，山が険しい。氏叟の人はよくそれに依拠して叛乱をおこす」と記され，又「[陰平郡]では，土地や山が険しく，人民が剛勇である。氏叟人が多く，

中に黒白水羌、紫羌、胡虜などがいる。風俗習慣は武都と大体同じである」と記される。我々は、徙（叟）は原住民族の一種であると推測することができる。

笮都は、大体「移徙」の一種に属する。『後漢書・南蛮西南夷列伝』では、笮都の風習について「笮都夷は、武帝によって開かれ笮都県となす。そこに住む人は皆被髪をしており、服を左前に着、例え話が好きで、住居は大体汶山夷と同じ」と記される。この種の「被髪」の髪型には、編髪と披髪（ふり乱された髪型）の二種類が含まれる。但し、かれらの髪型が昆明人のものと同じであると推測されることからみれば、編髪型に属すると判断できる。汶山夷の近くに居住していることからみると、住居は石造建築であるかもしれない。笮人は、邛崃山の中に住み、高い山と深い谷の間の交通を便利にするために、かれらは早くから吊り橋あるいは滑り索道を創造した。これらはかれらの最も顕著な文化的特徴を構成した。中原民族では、これを「笮橋」と称する。『太平寰宇記』の中で、「夷人は大水の上を簾の橋を架け、笮橋と呼ぶ」と記されることによれば、かれらの民族名は、たぶんここに由来するのであろう。

このほかに、『後漢書・南蛮西南夷列伝』では、笮都夷という項目の中に、多くの旄牛徼外の夷が後漢永平時代（紀元58～75年）に、全部落を挙げて漢王朝に従属したことが記載される。これらの部落は、北の「汶山以西」から、南の越嶲郡まで、合わせて「百余の国、百三十余万戸、人口六百万以上」の規模を持ち、白狼、槃木、楼薄、青衣道夷、三襄夷、旄牛夷、などの部落名が挙げられる。これらは大体皆夷系民族に属する。この旄牛徼外という地区は、大体今の四川省甘孜藏族自治州に当たる。

現在の雅安地区、涼山彝族自治州と甘孜藏族自治州は、即ち秦漢時代の徙、笮と徼外夷人が住んでいた所である。以前ここから大量の石棺葬と土坑墓が発掘された。石棺葬の葬具は、長方形の石板で作られ、葬式は、直肢葬と屈肢葬である。墓の中から、山形格の銅剣と銅柄鉄剣、銅戈などが発見された。陶器類の特徴は、一種の双耳陶罐である。ほかに、粟類作物と毛氈の痕跡もある。その時代は、大体戦国から後漢までの間である。この種の墓葬は、この地区内に住む各種夷系民族の遺物である可能性が大きい。出土した文物の内容を総じてみれば、当時の夷人社会では、貧富両極の分化はみられるが、はっきりとは区別されず、しかも死後同一墓地内に葬られることから、当時の夷人社会は、血縁で結ばれる部落社会であり、社会内部における等級差別は顕著に表れていないことが分かる。かれらの多くは家畜と共に移動する牧畜経済に属するが、四川盆地の低海拔地区では、農業経済の割合は比較的大きく、住居は定住方式であると思われる。

冉駹

冉駹をはじめとする民族集団は、徙の東北に住み、大体四川省西北部、岷江の上流にある阿坝藏族自治州境内に分布する。漢の時代では汶山郡に属した。汶山郡が廃郡された後、蜀郡に

帰属した。

秦漢時代、四川の西北部は、民族の交接地域であるため、民族の属性は複雑である。秦から前漢まで、ここに住んでいた民族は少なくとも夷系と氏系などの二大集団がある。後漢には、また多くの羌系民族がここに住んでいた。『後漢書・南蛮西南夷列伝』では、次のように記載される。

冉駹夷者、武帝所開。元鼎六年、以為 山郡。……其山有六夷七羌九氏、各有部落。其王侯頗知文書、而法嚴重。貴婦人、堂母族、死則燒其尸。土氣多寒、在盛夏冰猶不積、故夷人冬則避寒、入蜀為佣、夏則違暑、反其邑。衆則依山居止、累石為室、高者至十余丈、為邛籠。又土地剛鹵、不生谷、粟、麻、菽、唯以麥為資、而宜牧畜。

『華陽国誌・蜀誌』では、この土地について、「六夷、羌胡、羌虜、白蘭、峒など九種の民がいる」と記載され、民族雑居の地区であることが分かる。『史記』の文脈を分析すれば分かるように、司馬遷は、往々として什数を以て部落あるいは部族の中から、最も大きいのを一つ二つ選んで記述する。このため、選ばれた冉駹は、たぶん、前漢中期のこの地区で最も広く分布し、最も人口が多い民族集団であろう。冉駹人の社会状況と風習について、『後漢書・南蛮西南夷列伝』の中で比較的詳しく記載されているが、これは当該地区内に住む夷、羌、氏など三系統の民族状況を大ざっぱに記述したものであるため、詳細に見分ける必要がある。冉駹人に関する古代文献記載と結びつけてみると、大体、冉駹人は牧畜が中心であり、部分的に農業も営んでいた。農作物は麦と粟である。生活は家畜と共に移動する非定住式と定住式の両方がある。家屋は「石を重ねて、室となす」の「邛籠」建築である。

岷江の上流、即ち秦漢時代の「冉駹」が住んでいた所で、かつて大量の石棺葬が発掘された。葬具は長方形の石板で作られ、葬式は仰身直肢葬などである。墓の中から、山形格の銅柄鉄剣、鉄矛、銅剣、銅戈、銅鉞、銅牌、半両銭などが発見された。陶器は、双耳陶罐が特徴とされる。キビ類の作物と麻布の痕跡も発見された。時代は大体戦国から前漢までのものと思われるが、その影響は後漢後期まで及ぶ。このような墓葬は、たぶんこの地区の冉駹人の遺物であろう。出土した文物の内容を総じてみれば、当時の冉駹人社会では、すでに貧富の両極分化がはっきり存在していた。富者は、副葬品が豊富であり、金、銀、珠玉宝石が副葬されるが、貧者には、陶罐あるいは粘土製のさかずきが一つあるのみである。しかし、貧富に関係なく、一様に石棺が使われ、しかも同一墓地内に葬られる点からみれば、当時の冉駹社会も他の西南民族と同様に、戦国から漢までの時代において、部落上層部が新しい貴族に転化したものの、部落の普通成員との間には、血縁関係が存在していたと思われる。

以上、我々は、主要な夷系民族について逐一検討した。ここで、『史記』、『漢書』、『後漢

書』、『華陽国誌』などの文献記載と考古の出土資料によって、夷人の主要な文化要素を次のようにまとめることができる。髪型は編髪である。山地高原に生活し、その住居は基本的に牧畜業に便利であるが、農業には不便である。大部分の夷系民族は、家畜と共に移動し、定住はしないが、一部はしだいに定住あるいは半定住に変化していった。経済類型は、牧畜を主として、家畜はヤク、羊、馬などを持つ。定住あるいは半定住の夷人は、麦類と粟類の作物を植える。初期では君長を持たない集団もあるが、漢以後、社会分化に伴い、君長などの首領が現れた。籐などを用いて「箆橋」を作ることに長じる。葬俗では、石棺葬が多く使われる。剣術に長じ、山形格剣が使われる。皮で作られた甲や盾がよく用いられる。双耳陶器を使用する。

VI 氏系民族の分布

氏と、羌の民族起源は同じであろう。最初は、同一族であり、西方に住み、言語も中国・チベット語系統に属するため、中国の古代文献の中では氏と羌が併称されることが多い。最初の生活方式は、両者とも「所居無常、依随水草。地少五谷、以産牧為業」であり、遊牧民、狩猟民に属したが、以後、羌人の居住区域の拡大に伴い、一部は山谷の低い所に移住した。居住環境の変化に伴い、一部の羌人では、元来の生活方式がしだいに変わり、農業経営が始まった。農耕をするには、低い川谷平地に定住する必要がある。このように羌人から分離していった人々は氏と称される。『逸周書・王会解』の中で、「氏羌以鴛鳥」と記されることに対し、晋の孔晁が「氏地にいる羌はそれぞれ違うため、氏羌と呼んだが、今は氏と呼んでいる」と解釈する。漢の時代では、氏という字は、高低の低として使われることから、「氏地之羌」は即ち低い所に住む羌人を指す。これは、氏羌分化の確証である。

早期蜀人（蚕叢）

上古時代、一部の氏人は川西高原から成都平原辺縁に進入して、早期蜀国の支配民族になった。これは蚕叢氏である。蚕叢氏について次のような記載がある。

蚕叢始居岷山石室中。（章樵注『蜀都賦』引『蜀王本紀』）

有蜀侯蚕叢，其目縦，始称王。死作石棺石槨，国人從之。故俗以棺槨為縦目人冢也。（『華陽国誌・蜀誌』による）

蜀之先称王者有蚕叢，柏濩，魚鳧，開明。是時人萌椎髻左衽，不曉文字，未有礼樂。從開明以上至蚕叢積三万四千歳。（『前漢文』第53巻の中で『蜀王本紀』を引用した所による）

これらの記載から、蚕叢氏が活動した期間は非常に長く、最初の区域は、主に成都平原西北

部の山地，即ち岷江上流のあたりであることが分かる。清初の陳一律注『蜀水考』では「[岷江]は又，南へ蚕陵山を通して流れていく。昔の蚕叢氏の国である」と指摘する。漢代には，蚕陵県という県が設置されていた。汶川，灌県の境内には，蚕とかかわる古代地名遺跡が少ない。例えば蚕崖関，蚕崖石，蚕崖市などである。これらの地名は，蚕叢氏に関する古伝説と関係があるはずであろう。秦漢時代までは，ここに氏人が住んでいたため，秦漢の時代に湍氏道を設置していたのであろう。道というのは，秦漢時代，民族地区に設けられた県レベルの行政機構である。「氏道」とは即ち氏人が集まって住居する地区を意味する。湍氏道の位置は，大体今の灌県，彭県と汶川のあたりである。今の彭県と茂汶の境に今でも湍氏鎮という所があり，たぶん古代地名の名残であろう。蚕叢氏は，早期，石室に住み，死後，石棺に葬られるという説は，文献記載と考古学上発見された岷江上流の早期文化と一致している。

蚕叢氏は国が滅んだ後も，一部の氏人が続いて川西平原に残り，活動していた。例えば，成都の百花潭春秋晩期戦国早期墓の中から，錯銀銅壺が一つ出土した〔四川省博物館 1976〕。この壺の上に桑を摘む図案がある。桑を摘む人物の髪型は，二種類に分けられる。一つは，椎髻人物で，人数は多く，濮系民族に属する。もう一つは，編髪人物で，人数が少なく，氏系民族に属する。

白馬氏（白蘭，峒）

白馬をはじめとする氏系民族集団は，大体漢の時代の武都郡および汶山郡（蜀郡北部）と広漢郡の北部に分布する。例えば，広漢郡に剛氏道，甸氏道があり，蜀郡湍氏道がある。これらの道名は明らかに氏人が集まって住んでいるためにつけられたのであろう。これらの地区は，現在の甘肅省東南部と四川省西北部の一部に当たる。

武都郡と広漢郡の北部は，氏人が集中して住む地区であるが，汶山郡は多民族雑居の地区である。『後漢書』の中で，そこに「六夷，七羌，九氏」と記載されていることから，ここには氏人が居住していたと判定できる。「九氏」というのは，氏人の種類が最も多いことを示していると思われる。氏人の具体的な種類については，『華陽国誌・蜀誌』の中では，「六夷，羌胡，羌虜，白蘭，峒など九種類の民がいる」と記される。その中で，後の二種，即ち，白蘭と峒は，たぶん氏系民族に属する。

氏人の経済類型については，三国時代に魚豢が書いた『魏略・西戎伝』『三国志・魏書・烏丸鮮卑東夷伝』裴松之注引の中で，氏人は「皆布を織ることができ，農業に長じる。豚，牛，馬，驢，騾などを飼う」と記される。『後漢書・南蛮西南夷列伝』でも，氏人は「麻田を持つ。またそこに各馬，牛，羊，漆，蜂蜜がとれる」と記される。氏人は牧畜業を営み，農業も営んでいたことが分かる。

秦漢時代における氏人の社会組織と風俗習慣について，『後漢書・南蛮西南夷列伝』では，

汶山郡のことを次のように記載している。

其山有六夷七羌九氏，各有部落。其王侯頗知文書，而法嚴重。貴婦人，党母族。死則燒其尸。土氣多寒，在盛夏冰猶不積，故夷人冬則避寒，入蜀為佣，夏則違暑，反其邑。衆則依山居止，累石為室，高者至十余丈，為邛籠。又土地剛鹵，不生谷，粟，麻，菽，唯以麦為資，而宜畜牧。

『後漢書』はまず「其の山〔汶山〕には、六夷、七羌、九氏がある」と記し、その後、社会風習と経済事情について概括的に記述している。その中で、母系民族社会の残存と死後火葬を行うことなどは、羌人についての記述であるに違いない。但し、石造の「邛籠」に住むというのは、氏人と夷人の風習であるはずである。古代では、牧畜移動の風習に適應するため、羌人の家屋は主にテント式の建築であった。しかし、氏人は昔から「地位の高低を問わず皆土や板で作られた家に住む」ため、もともと家屋を造る経験を持ち、西南山地に移住してからは、当地で取れやすい原料を利用して「石で家を作る」ようになった。これは、ごく自然なことである。漢の時代の「邛籠」は、唐の時代では彫あるいは彫舎と称される。『新唐書・南蛮伝』では、「(黎，邛二州には)西に三つの王蛮があり，大体竿都夷，白馬氏の後代である。……軋を重ねて中に住み，𪔐舎（彫舎と同じ）と称す」と記される。この地区にいる後代の羌人が石造の家に住んでいたことは、氏人から影響を受けた結果であろう。

氏人社会の階層分化は比較的早い。そのため、『魏略・西戎伝』では、「氏人は王を持つ。その由来は古い」と記される。ここから、『史記』と『後漢書』の中でこの地区に「君長」，「王侯」および厳格な法律などがあるという記述は，おそらく夷人のことを指す以外に，主に氏について言ったのであろう。「冬には寒さを避けるために，蜀に行って雇い人となる」という記述は，すべての氏人を指すのではないが，少なくとも主に氏人を指して言ったのであろう。『太平寰宇記』第78巻「茂州風俗」では，「貧者は，冬には寒さを避けるために入蜀し，雇い人となり賃金で食べる。蜀人に作氏と呼ばれる」と記される。作氏というのは，即ち雇い人の氏人のことである。仮に古代にこの仕事をする者の多くが氏人でなければ，このような呼称は発生しなかったのであろう。

『後漢書』では，また，この地区に「王侯が文書をよく知る」と記される。これはたぶん，氏人の中で当時すでに文字が使われはじめたことを指している。その文字は漢字である可能性はあるが，別の文字であるかもしれない。その種の文字は，まだ発見されていないが，蜀人は文字を持っており，しかも早期蜀人の支配集団は即ち氏人の一種であったことは已に述べた通りである。秦が蜀を滅した後，この種の文字は巴蜀地区で使用されなくなったが，辺境地区の氏人の間では一時期使われていた可能性もある。

我々は、『後漢書』、『魏略』、『漢書』、『詩経』、『南齊書・氏伝』などの文献によって、氏人の主要文化要素を次のように概括することができる。即ち、髪型は編髪である。農耕に便利な険しい山々の谷間に生活し、しかも山峯で牧畜業を営むことも可能である。経済類型は、半農半牧であり、農作物は、大麦が主で、家畜には、豚、馬、牛、驢、騾などがある。漆を産出する。蜜蜂を飼い、蜜を取る。土を煮て塩を作る。麻を植え、しかも麻布を織ることに長じる。青色と紅色の服装を好む。石造の「邛籠」建築と板で建てられた家屋に住む。社会階層の分化がはっきりしており、君長、王侯が存在する。法律を持つ。文字を持つ。石棺葬の風習を持つ。

VII 羌系民族

「羌」という漢字は、羊を放牧する人のことを意味する。羌人は中国西部の古い遊牧民族である。早く商周時代に中原民族と比較的密接な交流があり、周人の母系は即ち羌人であるという。

羌人の起源については、『後漢書・西羌伝』の中で、次のような比較的晩期の伝説が記される。

羌無義爰劍者，秦厉公時（前476～前443年）為秦所拘執，以為奴隶。不知爰劍何戎之別也。後得亡歸，而秦人追之急，藏于岩穴中得免。羌人雲爰劍初藏穴中，秦人焚之，有景象如虎，為其蔽火，得以不死。既出，又与剽女遇于野，遂成夫婦。女恥其状，被髮覆面，羌人因以為俗，遂俱亡入三河（今黄河，賜支河，湟河）間。諸羌見爰劍被焚不死，怪其神，共畏事之，推以為豪。河湟間少五谷，多禽獸，以射獵為事，爰劍教之田畜，遂見敬信，庠落种人依之者日益衆。

この伝説から羌人とトラの関係が密接であることが分かる。上古時代、主に黄河上流地区に群居し、「南に蜀漢徼外夷に隣接し、西北に御善、車師諸国に隣接する」（『後漢書・西羌伝』による）というように、現在の青海と甘肅南部の山岳高原地帯にも分布し、その地域は広大である。西晋の司馬彪『統漢書』の記載によれば、「西羌は賜支の西から、河首の左右まで、河関の西部に居住し、その範囲は千里に数えられ、河曲が含まれる」というように、古代羌人が分布した中心地帯は、現在の青海省東部の黄河河曲地帯およびそれ以东と以北の地である。

戦国以後、一部の羌人は、青藏高原東部の縁辺を横断する山脈に沿って南へ下り、蜀の境外に移動した。『後漢書・西羌伝』では次のように記載される。

至爰劍曾孫忍時，秦献公初立，欲復穆公之跡，兵臨渭首，滅狄獫狁。忍季父畏秦之威，將其種人附落而南出賜支河曲西數千里，與衆羌絕遠，不復交通。其後子孫分別，各自為種，任隨所之。或為牦牛種，越嶲羌是也，或為白馬，広漢羌是也，或為參狼種，武都羌是也。

西南地域の羌系民族の活動に関する記載は、前漢時代にはまだ明確でなく、後漢になってしだいに多くなってきた。『後漢書』の中で、上述した記載以外に、蜀郡の境外にいる羌人の活動も記載されている。『後漢書・和帝紀』では、永元六年（94年）、「蜀郡の境外羌人が民を率い、使者を派遣して帰順してきた」と記載する。『後漢書・安帝紀』では、安帝永初元年（107年）、「蜀郡境外の羌人が帰順してきた」、永初二年、「広漢境外の参狼羌が投降した。広漢の北部を分けて、属国都尉（官の名）となす」と記録されている。これらは、後漢の早中期以前、羌系民族は主に蜀郡の境外に分布し、後漢中期になってはじめて断続的に漢王朝に帰順したということを説明している。

汶山郡羌人の社会と風習について、『後漢書・南蛮西南夷列伝』の「貴婦人を貴び、母族を党となす、死後、その尸を焼く」という記載は、専ら羌人の風習を指す。つまり、当時の羌人社会では、女性が比較的高い社会地位を享受し、家系は母系が中心とされ、しかも死後火葬を行うということである。羌人の経済状況については「土地が剛鹵であるため、穀、粟、麻、菽などは作れず、麦は唯一の食料とされる。しかし、牧畜業には便利である」という記載があり、この地区でも羌人は当時、牧畜を中心に営み、わずかながら農業経営も行われていたと説明している。

『後漢書・西羌伝』、『魏略』、『庄子』、『呂氏春秋』、応劭の『風俗通』、『北史』、郭義恭の『広記』などの文献によって、秦漢時代における羌系民族の生活環境と主要文化要素を概括することができる。髪型はふり乱された髪である。生活環境は比較的寒く、水草が多くて五穀が少ない地域である。経済類型は、典型的な牧畜経済であり、主に羊、牛、馬などを放牧する。ある地区では、わずかに農業も行われ、大麦、粟、豆、燕青（カブ類）などがある。住居様式は、定住せず、家畜を連れて水草のある所に移動し、牛毛や羊毛で織ったテントに住む。狩猟を好む。女性の地位が高く、家系では母系が中心である。固定した氏族制度はなく父の名と母の姓が子供の姓名とされる。十二世紀以後、交際婚姻になる。父が亡くなれば、母を妻とし、兄が亡くなれば、兄嫁を妻とする。娘を嫁に出せば、家畜百頭にも至る結納金が入る。女は豪華な毛氈で作った服を着る。葬俗は火葬と土葬がある。文字を持たず、草木の変化を歳時とする。部落内に住居地区が分けられ、それぞれ君長や首領がおり、互いに干渉しない。法律、賦役制度はない。トラを崇拜する。

VIII 漢系民族

漢系民族が西南地域に入るのは、主に紀元前316年、秦が巴蜀を滅して以後である。秦漢時代、秦漢帝国は西南地域で新しい領土を拡張した後、新しい領土での支配と経済開発を強固にするために、大規模な移民、開墾事業を行った。これらの移民はまず自然的条件と経済基盤がよく、しかも交通道路の沿線にある地区を占拠し、それから次第に周りへ拡散していったのである。

巴蜀地区では、初期の移民は殆ど川西平原および漢中地区に群居している。この他に秦から蜀へ、蜀から巴へ、蜀から西南夷へ至る交通沿線にも分布している。前漢になってから、移民の分布は次第に拡大し、後漢になると、川北地区の一部を除いて、漢人は四川盆地内と漢水の谷地帯あたりにあまねく分布するようになる。西南夷地区では、前漢中期以後、武帝が大挙して西南夷へ進軍すると同時に、大規模な移民活動を行いはじめたのである。漢の移民の西南地域における分布の特徴は、主に自然条件のよい小型盆地と川に近い平坦な地帯および重要な交通沿線地区に集まることである。

西南地域への移民は、秦が巴蜀を征服してから後漢の末年まで（紀元前316～紀元220年）五百年も続いた。この間に、移民の高潮期が三回みられる。一回目は、秦が巴蜀を征服してから秦の末までの約百余年間であり、移民の来源は秦の本土と中原地区である。二回目は、前漢中期、漢武帝が二回に亘って西南夷地区に派兵した時であり、巴蜀地区と中原地区から西南夷へ移民が行われた。三回目は、後漢の末年の戦乱を契機に大量の移民が中原から進入してきたのである。自発的な移民である三回目を除いて、前二回とも、大規模な国土開拓活動に伴い、秦漢帝国が意図的かつ組織的に行ったものである。

内地から西南地域への移民の方式と移民の来源は多種多様である。政府が計画的に普通の民を一家を挙げて移住させたのが最も普通の方式であり、移民の数量も最も多い。追放された刑徒もいた。この場合犯罪を犯した本人の他に、家族や舎人も移住させられた。敗戦国の国王およびその一族と貴族大臣などの俘虜、敗戦国の富豪商人や豪強などをも本土から移住させ、その殆どの移住先は巴蜀地区であった。また自発的な移民もあった。

秦漢からの移民は、西南地域に移住した当初、全体から言えば、当地の土着民と雑居していたが、小範囲から言うと、移民で固まって群居し、一つ一つの移民開墾生活区を形成していった。こうした状況は移民自身の生存と、政府の管理に有利である。例えば、『後漢書・南蛮西南夷列伝』では、漢武帝天漢四年（前97年）、蜀郡西部の二カ所に都尉を設け、「一つは、旄牛で徼外夷を統率し、一つは青衣で漢人を統率する」と記載している。

秦が巴蜀に進入した当初、特に築城と邑の設置を重視した。早期の移民は城と邑の中に群居

したのである。例えば、『華陽国誌・蜀誌』では、秦が前316年に巴蜀を征服し、前314年に一万戸の秦民を蜀に移住させ、前311年には蜀の川西平原に成都城、郫城、臨邛城を築いたことを記載している。その中で成都城築城についての記載は比較的に詳しいため、そこから、成都城の中は、「里閭が修整され、市が開かれ、店舗が陳列されており、咸陽〔秦国の首都〕と同様」であることが分かる。川西平原に城と邑が多く造られたことは、多くの秦民がここに住んでいたことと関係があることは明らかであろう。近年、榮経で秦漢時代の古城が発見された〔趙・李・陳 1988〕。古い城の周りでまた単独の秦人墓地と漢人墓地が発見された。これらは、明らかに秦漢時代に城内に群居した秦人と漢人の墓地である。

IX 結 語

最後に、秦漢時代における西南地域の民族事情を簡単に統括する。

1. 秦漢勢力が進入する前

秦漢帝国の勢力が西南地域に進入する以前、ここに住む民族は非常に複雑であるが、主に二大系統即ち南夷と西夷に分けられる。南夷とは主に濮系民族を指し、その人口は多く、支系が複雑であり、西南地域東部の広い区域に居住する。このほかに、南夷系統の中には一部の越系民族と南アジア語系孟高棉語族の民族も含まれる。前者は西南地域東部の一部の地区に、後者は西南地域西南部の一部の地区に分布する。西夷とは主に夷系民族を指し、その人口も多く、支系が複雑であり、西南地域西部の広い区域に住む。この外に、西夷系統の中に氏系民族も含まれ、主に西南地域西北部の一部の地区に住む。

総じて言えば、南夷民族は、農耕民族に属し、山川の近くに住むものが多く、伝統的な南方民族であり、文化には中国南方および東南アジア地区に住む多くの民族の文化と類似点が少なくない。西夷民族中の夷系民族は牧畜民族に属し、山地高原に住み、その文化には、中国北方の遊牧民族の文化と類似点が多い。西夷民族中の氏系民族は、半農半牧民族に属し、山谷の低い所に住み北方遊牧民の羌人と同源であるが、住居環境と社会経済の変化に伴い、その文化にも比較的大きな変化が生じたのである。

2. 秦漢勢力が進入した後

秦漢帝国の勢力が進入した後、西南地域の民族事情には比較的大きな変化が発生した。この変化は、主に民族の分布区域と民族の文化形態の両方面に表れる。

民族の分布区域の面では、秦漢帝国の西南拡張・大量移民政策の実施が、当区域の土着民、とりわけ東部に住む濮系民族の移住をもたらした。一部は、北から南へ長距離移動し、その移

住は東南アジア地域にも至っている。一部は盆地や河谷平原から山間地帯に移住し、自然条件のよい土地は次第に秦漢移民に占拠される。盆地と河谷平原地区に留った土着民は、次第に漢系民族の中に融け込んだ。当地域西部では、秦漢帝国の西北地区への拡張によって、一部の羌系民族は次第に南へ移動し、両漢時代にだんだんと夷系民族区域の一部に進出した。このため、この区域に住む一部の夷系民族の他の地区への移住をもたらした。後漢時代では、雲南高原東部と貴州西北部にすでに大量の夷系民族が出現した。

文化形態の面では、秦漢帝国の支配と大量の秦漢移民の到来に伴い、この地域の文化は、中華文明の強い影響を受けた。とりわけ、南夷地区でこの影響が強烈である。西夷地区では西へいくほどこの影響が弱まる傾向がみられる。その結果、この地域において、土着民族の文化はそれぞれの程度で衰退し、特に、南夷地区に住む土着民族が持っていた多くの文化は、完全に消失してしまったのである。

謝 辞

本稿は、中国語で書かれたものを張道杰氏に翻訳していただいた。ここに記して謝意を表します。

参 考 文 献

- 常璩. 1984. 「巴志」『華陽国志校注』劉琳（校注），15-102ページ所収. 成都：巴蜀書社.
羅二虎. 1997. 『魂歸峭壁——崖葬・懸棺』成都：四川教育出版社.
蒙默. 1985. 「試論漢代西南民族中的“夷”与“羌”」『歷史研究』1：11-32.
四川省博物館. 1976. 「成都百花潭中学十号墓發掘記」『文物』3：40.
———（編）. 1959. 『四川船棺葬發掘報告』北京：文物出版社.
童恩正. 1979. 『古代的巴蜀』成都：四川人民出版社.
趙殿增；李曉鷗；陳顯双. 1988. 「嚴道古城的考古發現与研究」『中国考古学会第五次年会論文集』北京：文物出版社.